

日本におけるマルサス人口論の受容と 宮沢賢治「ピヂテリアン大祭」

山 崎 好 裕*

はじめに

宮沢賢治の死の翌年である1934年に原稿が発見された「ピヂテリアン大祭」という童話がある。現存する草稿には、賢治自身が一度成立した同作品を、花巻温泉を舞台にして「1931年度極東ピヂテリアン大祭見聞録」として改作しようとした痕跡があるので、1930年以前には成立していたことが窺われる。

「ピヂテリアン大祭」のなかには、マルサスの名前と人口論の内容の紹介があり、当時におけるマルサス人口論の日本での受容状況を知るための手がかりとなることが考えられる。また、宮沢賢治のマルサス人口論理解を参照にしながら、マルサス自身が菜食と肉食について何を考えていたかを考察する縁ともなるであろう。

本稿では、まず、「ピヂテリアン大祭」の内容および性格と、そこにおいてマルサス人口論がどのように理解されているかを考察する。その後、1930年に至る、日本におけるマルサス人口論の受容史を概観したい。そして、宮沢賢治の人口論理解との比較の下、とりわけ肉食と菜食の関係を軸にして、

*福岡大学経済学部

あらためてマルサス人口論を読み込んでいく。

1. 「ビヂテリアン大祭」におけるマルサス人口論

ビヂテリアン大祭という架空のお祭りであるが、宗教としての菜食主義の大祭であり、「私」は今年ニューファウンドランド島の山村ヒルテイに、祭りに参加するために出かける。「私」の解説によれば、菜食主義者は大別して同情派と予防派とに先ずは大別できる。同情派は言うまでもなく、動物も私たちと同じ命を持っているのだから、殺して食べるのはかわいそうであると考え、菜食主義を貫いている人々である。これに対して、予防派は、肉食は人間の健康を損ねているいろいろな健康被害をもたらすので肉食を止めようと訴える人々である。

この2派の分類は主義主張からの分け方であるが、実際にどのような実践をしているかについて、三つに分類ができると「私」は言う。第1は、チーズやバターなどの乳製品を含めて、動物由来の物は一切食べないという人々であり、こうした実践をしている人は予防派に多いのではないかと言う。第2は、乳製品や卵は動物の命をとるわけではないので食べていいという穏健な菜食主義者である。第3は、常識的な菜食主義者というか、動物の肉も食べなければいけないときは食べなければいけないのだから、感謝の念を忘れず、ごめんなさい、ごめんなさい、と言って食べる人々である。この第3のグループには「私」も含まれるが、印象的な言葉が出てくる¹。

もしたくさんのいのちの為に、どうしても一つのいのちが入用なときは、仕方ないから泣きながらでも食べていよ、そのかはりもしその一人が自

¹ 宮沢（1973）、209ページ。

分になった場合でも敢て避けない

宮沢賢治が田中智学の国柱会の熱心な信者であったことはよく知られている²が、自らの身体を飢える者のために差し出す捨身飼虎の姿がここにはある。

ヒルテイに着いた「私」たち一行の前に、偏狭な菜食主義者を非難するパンフレットが反対派によって配られる。その最初の一つにマルサス人口論の内容が現れている。

マルサスの人口論は今日定性的には誰も疑ふものがない。その要領は人類の居住すべき世界の土地は一定である、又その食料品は等差級数的に増加するだけである、然るに人口は等比級数的に多くなる。即ち人類の食料はだんだん不足になる。人類の食料と云へば蓋し動物植物鉱物の三種を出でない。そのうち鉱物では水と食塩とだけである。残りは植物と動物とが約半々を占める。ところが茲にごく偏狭な陰気な考の人間の一群があつて、動物は可哀さうだからたべてはならんといひ、世界中に之を強ひやうとする。

このように人類は常に不足している食料を植物と動物とから摂取して生きているのである。もし、菜食主義者の言うように動物を一切食べてはならんということになるうものなら、つまりは人類の半分に死ねということになる。

² 牧野(2017)は、智学が明治22(1889)年に著した『佛教僧侶肉妻論』で萬国禁肉会を開催したいという展望を述べていることから、賢治がここからピヂテリアン大祭のアイデアを得た可能性を示唆している。また、工藤(2010)は、賢治が明治26(1893)年にシカゴ万国博覧会のなかで開催された万国宗教大会のパンフレットを手にとったかもしれないと述べている。

これが最初のパンフレットの主張である。

パンフレットの2枚目は、動物を可哀そうというが、動物には悲しみや恐怖の感情はないのだから、殺すことに抵抗を感じる必要はないという内容であった。パンフレットの3枚目は、菜食主義者は植物と動物を明確に区別できるように言うが、それはどうだろうというものである。植物も命があると考えられるから、動物が食べられないなら植物も食べられないというのが論理的だろうという主張である。4枚目のパンフレットには、人間の歯の構造を見れば、人が本来菜食も肉食もする雑食性の動物であることがわかるのであり、肉食を禁ずることに生物学的な根拠はないとあった。

これらのパンフレットのせいで「私」たちは幾分シュンとなってしまうのだが、ともあれ大祭の会場に向かい、500人ほどが入れる天幕へとやってきた。そこには異教徒席という場所もあって、思えばパンフレットは菜食主義者以外の異教徒によって配られたものかもしれなかった。

大祭が始まると、異教徒席から立ち上がった人は菜食主義への疑問を提示し、それに菜食主義者の代表が答えるというやり取りが何度か行われる。このなかで、興味深いのは、後に見るマルサス人口論の議論と同様の論旨を展開している、ニューヨークから来た背広姿の大学生の反論である³。

即ち論難者は、そのうち動物を食べないじゃ食料が半分に減るといふこいつです。冗談じゃありませんぜ。一体その動物は何を食って生きてみますか。空気や岩石やゐるのぢやないのです。牛や馬や羊は燕麦や牧草をたべる。その為にした南瓜や蕪青も食べる。ごらんなさい。人間が自分のたべる穀物や野菜の代りに家畜の喰べるものを作っているのです。牛一頭を養ふには八エーカーの牧草地が要ります。そこに一番計算

³ 宮沢（1973）229ページ。

の早い小麦を作って見ませうか。十人の人の一年の食糧が毎年とれます。牛ならどうです。一年の間に肥る分左様百六十キログラムの牛肉で十人の人が一年生きてゐられますか。一人一日五十グラムですよ。親指三本の大きさですよ。腹が空りはしませんか。

マルサス人口論の文脈で言っても、多くの人に食料を与えるためには、肉食より菜食の方がよいのである。実際マルサス自身が、後に見るようにほぼ同様の議論をしている。また、マルサスは使役獣のことも書いていて、同じ青年の言葉として宮沢賢治が叙述したこととの類似性は驚くほどである。

よくわかりにならないやうですがもっと手短かに云ひますともし人間が自然と相談して牛肉や豚肉の代りに何か損にならないものをよこして呉れと云へば今よりもっとたくさん人間が生きて行かれる位多くの喰べものを向ふではよこすと斯う云ふことです。但しこれは海産物と廃仏によって養う分の家畜は論外であります。然しながらそれを計算に入れても又大丈夫です。家畜だってみんな喰べるものばかりでなく羊のように毛を貰ふもの馬や牛のやうに労働をして貰ふものいろいろあります。

最後の部分、逆接の前後で論旨がどう繋がっているのか、今一つ不明な点があるが、要するに、古代中国のように汚物で豚を養えば、穀物の生産と消費を妨げないという反論に答えているのであろう。つまり、それでも肉食は止めた方がよいということである。なぜなら、羊毛用の羊や使役のための牛馬のように、食用以外に養わなければいけない動物がいる以上、余計な穀物を家畜に与えることは、人間の生存にとって無駄が多いということになるからである。

宮沢賢治はこの童話を、菜食主義を一種の宗教として揶揄することで一度

客観化してみようとして書いているのだと思う。そのせいか、最後はキリスト教神学と仏教理論の対話のような議論が続くことになる。仏教徒である「私」は、神学者のマットン博士や仏教徒の陳氏の、宗教は必ずしも肉食を禁止していないという主張を踏まえて自説を熱く述べている⁴。

私は次に宗教の精神より肉食しないことの当然を論じやうと思ふ。キリスト教の精神は一言にして云はゞ神の愛であらう。神天地をつくり給ふたとのつくるといふやうな語は要するにわれわれに対する一つの譬喩である、表現である。マットン博士のやうに誤った撰理論を出さなくてもよろしい。畢竟は愛である。あらゆる生物に対する愛である。どうしてそれを殺して食べることが当然のことであらう。

釈迦は弟子たちに、残虐な仕方でも殺した獣でなければ、その肉を食べることを禁じていないという陳氏の主張⁵に対しては、「私」は同じ仏教徒としてより熱心に反論している⁶。

仏教の精神によるならば慈悲である、如来の慈悲である完全なる智慧を具へたる愛である。仏教の出発点は一切の生物がこのやうに苦しくこのやうにかなしい我等とこれら一切の生物と諸共にこの苦の状態を離れたいと斯う云ふのである。その生物とは何であるか、そのことあまりに深刻にして諸氏の胸を傷つけるであらうがこれ真理であるから避け得な

⁴ 宮沢（1973）、241ページ。

⁵ うがった見方をすれば、熱心な浄土真宗信者であった父政次郎と確執があった賢治が、陳氏に仮託して、真宗が僧侶に肉食を許していることを批判しているともとれる。実際、白人で仏教徒の博士に、自分は浄土真宗の信徒であると名乗らせている。

⁶ 宮沢（1973）、241-242ページ。

い、率直に述べやうと思ふ。総ての生物はみな無量の劫の昔から流転に流転を重ねて来た。流転の階段は大きく分けて九つある。われらはまのあたりにその二つを見る。一つのたましひはある時は人を感じず。ある時は畜生、即ち我等が呼ぶところの動物中に生れる。ある時は天上にも生れる。その間にはいろいろの他のたましひと近づいたり離れたりする。即ち友人や恋人や兄弟や親子やである。それらが互にはなれ又生を隔ててはもうお互に見知らない。無限の間には無限の組合せが可能である。だから我々のまはりの生物はみな永い間の親子兄弟である。異教の諸氏はこの考をあまりに真剣で恐ろしいと思ふだらう。恐ろしいまでこの世界は真剣な世界なのだ。

ここで「私」が述べている議論が、晩年の、と言っても30歳代半ばであるが、宮沢賢治の仏教理解であることに疑いの余地はないであろう。しかし、余りに真剣に議論したことを恥じたのか、宮沢賢治は童話をどんでん返して結んでいる。

「私」を含む肉食主義者側の反論に対して、異教徒席の人々は、悔い改め、肉食主義者になることを皆約束する。だが、実は、異教徒側の仕掛けてきた論争が、大祭を盛り上げるために肉食主義者の祭司次長から頼まれた芝居だったことが明かされる。会場は大笑いになるのだが、「私」は茫然自失となってしまうのである。

このように、「ビヂテリアン大祭」は、宮沢賢治が肉食主義というものを一度客観視して、その本来の意味を確定するために書いた童話であると思われる。ここで注目したいのは、そのなかでマルサス人口論が取り上げられていることだ。賢治はどういう経路でマルサス人口論の議論を知ることになったのだろうか。また、1930年代までにマルサス人口論はどの程度正確に日本に受容されていたのだろうか。「ビヂテリアン大祭」で賢治が肉食主義を宗

教として扱っていたことで、イギリス国教会の牧師であったマルサスの人口論の論旨との比較もまた、興味深いものとなることが予想される。

2. 日本におけるマルサス人口論の受容と宮沢賢治

神田孝平が慶応3（1867）年に出版した『経済小学』に類似の記述が現れるというのが、マルサス人口論が邦語で記された最初になるだろう。ここにはマルサスの名は出てこないが、男女の情欲を抑えて人口を増やさないようにすることが必要だと述べている。明治になるとジョン・ステュアート・ミルやヘンリー・フォーセットと夫人の著作が翻訳される。ミルの翻訳は明治8（1875）年から同16（1883）年にかけて、後に外務大臣にまでなった林董が『彌児経済論』と題して順次刊行している。このなかで、ミルの叙述した限りでの人口論の内容がマルサスという名とともに登場する。

決定的な紹介となったのは、大島貞益が明治10（1877）年の『人口論要略』の出版である。これは上記のものに比べて比較にならないほど詳細にマルサス人口論を叙述している。ただし、直接の翻訳ではなく、イギリスの書籍のマルサスの部分だけを抄訳したものであった。

明治20年代に入っても原典からの翻訳は現れなかった。代わって、歴史学派の著作が数多く翻訳され、そのなかに現れるマルサス人口論が考え方の普及に貢献したと思われる。明治24（1891）年には、リチャード・イリーの著作を佐藤昌介が翻訳した『威氏経済学』が出版され、救貧法改正との関連性を含めて人口論が邦語で紹介されている。

イギリス歴史学派の経済学者ウィリアム・ジェームズ・アシュリーが古典派経済学者の著作を復刻し始めたのは明治28（1895）年であり、同年アシュリーはカナダのトロント大学に移っている。この叢書の1冊としてマルサス人口論も復刊されると、廉価であったこともあって日本に大量に輸入された。

アメリカ留学から帰国した三上正毅は明治43(1910)年、日進堂から『マルサス人口論』を出版した。同訳書はよく売れたようで、大正8(1919)年までに5版まで版を重ねている。

こうしたマルサス人口論への関心の背景には、おそらく、当時の貧困問題への注目があったと考えられる。また、大正期になるとマルクスの社会主義思想も盛んに導入されていたことも与って力があったと考えられる。河上肇は明治30年代から盛んにマルクス人口論を援用して、日本の人口増加を根拠に、日本が他国を征服して植民地化していく必要性を説いていた。その後、立場をマルクス経済学に転じた河上であったが、大正4(1915)年から大正5(1916)年にかけてマルサス研究の成果を3論文⁷にまとめて発表している。そのなかで河上はマルサスを「貧困学創始の一大天才」と褒め称えている。河上の評価は人口論初版が最も高い。河上は、マルサスが第2版で人口の人為的制限を発見したことで唯心論的楽観論へと変質したと考えている。人間の意識や理性を考慮してしまった結果、唯物論的自然法則の観点を失ったというのである。

ともあれ、河上は大正5(1916)年9月11日から12月26日まで大阪朝日新聞に『貧乏物語』を連載し、翌年には弘文堂書房から単行本として出版してベストセラーになった。このとき、宮沢賢治は盛岡高等農林学校在学中の20歳であった。同校図書館の蔵書を全て読破したと伝えられる賢治であるから、時代的雰囲気なかで河上らの著作を通じてマルサス人口論に触れた可能性は高いと考えられる。また、後述するように『ピヂテリアン大祭』中の肉食主義者の議論のなかには、マルサスが人口論のなかで展開していて本文を読まなければ知りえない論旨もあるから、賢治が三上の訳書を手にとった可能

⁷ 「マルサス人口論初版以下各版の差異」『経済論叢』第1巻第2号、「マルサスの人口論」『太陽』第22巻第4号、「マルサス人口論要領」『経済論叢』第2巻第5号。

性も否定できないと思われる。

さらに、賢治がマルサス人口論と関わるもう一つの重要な契機が、マルサスが東北岩手の貧農問題を解決するために化学肥料の普及を促進しようとしていたという点に見出せる。賢治は大正10（1921）年12月から稗貫農学校の教諭の職に就き、大正12（1923）年花巻農学校と名称を変更していた同校を昭和元（1926）年3月いっぱいまで退職している。ここで賢治は、生徒たちの将来の農業者として実践に繋がるような教育を心掛けており、肥料について時間をかけて教えている。退職後、実家の別宅に設立した羅須地人協会でも賢治は、活動の柱の一つとして肥料設計に取り組んだ。知識は農民に無料で提供されたが、配布枚数は合計2,000通に及んだと言う。大正13（1924）年、冷害にもイモチ病にも強く、高収量が期待される新品種として陸羽132号が導入され、岩手では8年で作付け品種の半分を占めるに至った。しかし、この品種は多量の施肥を必要としたため、賢治はそのニーズに対応しようとしたのである。

昭和3（1928）年8月、熱で病床に就いた賢治は12月に肺炎を併発した。この病気とともに羅須地人協会の活動も終焉を迎えた。翌年10月に東北砕石工場の鈴木東蔵が病床を見舞った。花巻での石灰石粉の販売が急増した理由が、賢治が農民に石灰肥料の使用を進めたことにあったと聞いたためである。病床を離れた賢治は昭和6（1931）年、砕石工場技師として雇用された。年俸600円であったが、全額が炭酸石灰の現物支給であった。その年のうちに再び病に倒れた賢治は、2年間の断続的な闘病を経て没したのであった。

この肥料との付き合いがどうしてマルサスと結びつくのかと言えば、農芸化学の父と呼ばれるユストゥス・フォン・リービッヒを通じてである。リービッヒは植物の生育に必要な栄養素が窒素、リン酸、カリウムという無機物からなるという3要素説、そして、最も摂取量が少ない栄養素によって生育が制約されるという最小律を唱えた。マルサス人口論の人口法則についても、

施肥を怠った略奪農法によって地味が劣化していくことを、古典派経済学者たちは自然法則として誤認していたとリービッヒは考える。適切に無機肥料を補填していくことで食料を増産し、人口問題を顕在化させないことが可能だとしたのであった。

リービッヒの理論はヨーロッパ、アメリカでは常識化していたので、明治以降日本を訪れた欧米農業指導者たちは、リービッヒの名前を直接出すことがなくても、事実上その施肥農法と無機栄養説を伝え、実践していった。そのなかで明治15(1882)年に来日して駒場農学校教授となったマックス・フェスカは、日本の農業反収の低さの原因を肥料資源の不足と農家の肥料購入資金の不足にあると指摘し、「日本のリービッヒ」とまで呼ばれている。

こうした指導があって、日本においても無機質肥料の製造と販売とが工業的に行われるようになってくる。高峰謙吉は欧米での視察で学んだ技術を用いて、過リン酸石灰を明治19(1886)年日本で初めて製造した。明治21(1888)年からは量産体制に入っている。

賢治が販売していたのは石灰肥料である。リービッヒの3要素には石灰は入っていないが、多量の降水によって土壌のアルカリ分が流出しがちな日本では、窒素、リン酸、カリウムに石灰を加えて肥料4要素と呼ぶこともある。さらに、過リン酸石灰、硫安(硫酸アンモニウム)、硫酸カリといった酸性肥料を長年施肥していると土壌が酸性化する。これを中和するためにどうしても石灰肥料が必要となるのである。

賢治は盛岡高等農林学校生徒時代、花巻農学校教諭時代、羅須地人協会での活動を通じて、リービッヒ流の近代農芸学に接し続けていた。そのなかで、マルサス人口論の食料増産への障害という問題と、潜在的には常に戦い続けていたと言えるわけである。

3 . マルサス人口論における菜食と肉食

マルサスは1798年に匿名で『人口論』初版を出版した後、1803年2版、1806年の3版、1807年の4版と相次いで署名入りで発表するようになった。その後、マルサスは古典派経済学者としての活動を本格化させ、1810年、1814年、1815年と相次いで経済問題を扱う論考を出版し、1920年に『経済学原理』初版を終に世に問うた。このような人口論で名を馳せたポップ・マルサスから経済学者マルサスへの変貌を最も予期させるのは、人口論のなかでは第16章である。

同章では、アダム・スミスを批判しながら、総量としての富の増加が貧民の状態を改善させるのに必ずしも役立たないことが多くの例示とともに述べられている。マルサスによれば、アダム・スミスは富の増加と貧民の状態の改善とをあまりにも直接的に結びつけ過ぎた。古典派経済学で富と呼ばれるのは、人々に効用をもたらす具体的な財貨そのものである。リカードウは、アダム・スミスに見られた富と価値との明確な二元論を断ち切り価値一元論に還元しようとした。しかし、マルサスの富の具体性の拘りは、彼の経済学者としての生涯を通じて変わるもののないものだったのである⁸。とりわけ、人口論では、富が工業製品と農産物からなることに注意が払われているのだが、要するに食料品が増産されない限り貧民の状況が改善されないという点がマルサスの論旨なのである⁹。

労働の価格が一般に上っても、食料の高が増加しないならば、食料の価格はそれに比例して間もなく騰貴する、この労働の騰貴がノミナルにすぎないことは自明である。そこで、この例の場合、せっかく労働の価格

⁸ 山崎(2019)。

⁹ 『人口論』翻訳、181-182ページ。

が騰貴すると考えたが、それは労働貧民が生活必需品便益品を取得する力を少しも増大しないのである。

それでは食料の生産はなぜ増大しないのか。マルサスは経済発展によって工業部門が拡大すると、労働資源が農業から工業へと移動するからであると考えている。後述するように、土地の改良その他の要因で農業の労働生産性は上がるのであるが、それを上回って農業従事者が減少していく。実際、イギリスでの歴史的経験がそのことを証明しているとマルサスは言う¹⁰。共有地や荒蕪地のエンクロージャーは食料の増産を招くかに思われたが実際にはその逆だった、というのがマルサスの認識である。こうした結果がもたらされたのは、同一の土地を使って、より人口維持力の小さい農業生産物が生産されるようになったためであった¹¹。

それまで多量の小麦を制裁していた大農場が牧場になって、囲い込み以前に比して、より少数の人手しか雇わない、それでヨリ少ない人口しか養わない、ということがまちがいない。牧場は小麦畑に比べると、その沃度は同一である場合、人間の生活資料を生産する量は少いというのが本当だ、そして、上等の食肉に対する需要がふえて、その価格が上り、そのため上等の土地が牧畜に転用せられるということが、たしかであるならば、そういう事情のために起る人間の生活資料の減少もまた、荒蕪地の囲い込みや農業技術の改良やのもたらす利益を、相殺するといわねばならぬ。

マルサスは、食用肉の価格が昔に比べてはるかに上っていると言う。これ

¹⁰ 『人口論』翻訳、184ページ。

¹¹ 『人口論』翻訳、184-185ページ。

は人々の平均的な生活水準の上昇によって食肉需要が増し、また、なかでも良質の肉が好まれるようになってきたという事情による。結果として、食用肉価格の値段が安かった昔であれば、作物の穫れないような土地でしか飼育できなかった牛が、小麦の耕作の適地で飼育しても十分に採算が合うようになってきた。肉牛は牧草を食んで大きくなるのだが、小麦生産地が牧場に転換された場合、本来収穫できたはずの小麦を消費して大きくなるのだと言ってもいい。実際マルサスはそのように解釈する。マルサスは肉牛を労働者に譬え、肉牛たちは富裕者の召使などの行う不生産的労働を行っているのと同じだとする。要するに消費だけはするが、その労働によって富を増大することはないからである。マルサス自身の表現では、肉牛は「彼の消費した粗生産物に何の価値をも加えない」¹²のである。

このような主張をするからと言って、マルサスは何も肉食を止めて菜食に切り替えた方が労働貧民の救済につながるという主張をしているわけではない。まして、イギリス国教会の牧師として、宗教的観点¹³から肉食をしないことを進めようというのでは全くない。「ビヂテリアン大祭」で宮沢賢治も書いているように、キリスト教から直接菜食主義を導くことはできないのである。そうではなく、マルサスは人類史を通じて貫かれてきた人口法則が、経済の発展した近現代においても貫徹することを述べているのである¹⁴。

¹² 『人口論』翻訳、185ページ。

¹³ マルサス人口論の初版には、神学章と呼ばれる第18章および第19章がある。マルサスは人口増加が生み出す害悪ということを主題に独自の神義論をこれらの章で展開した。人類が自らの運命を決定するときに理性や利己心を導きの糸にすることはできない。貧困や飢えとの戦いは神が人間性を向上させるために与えた試練である。こうした主張である。神学章は2版以降基本的に削除された。もちろん、これらの議論は菜食主義云々にはいささかも関わらない。

¹⁴ 『人口論』翻訳、186ページ。

食肉があがるのは、一般にいて、文明が進むと自然的な不可避な結果である、ただ私は次のように考えるだけである、現在は上肉の需要が多い、そこで当然に年々にそれを生産するために使われる上等の耕地も多い、また遊戯のためにたくさんの馬を飼う、こういうことが合して、この国の土地の沃度の一般的増進と同じ歩調で人類の食料の量が増加することをさまたげていると、そこでまた、この習慣が変れば、この国の生活資料の量、従ってその人口数も変るであろう、私は、それを少しも疑わない。

とは言っても、ここでのマルサスの議論は、肉食を止めて菜食にすれば多くの人口が養えるのだ、というふうに読み替えることは可能である。「ピヂテリアン大祭」では、ニューヨークから来た青年がそうした主張をしていたのであった。だから、第1章で指摘したように、宮沢賢治がマルサス人口論の全訳、または、かなり詳しい解説をした説明書を読んだ可能性があると思われる。

おわりに

リービッヒの研究の後、化学肥料が工業的に量産され、安価となって普及すると、農業の土地生産性が飛躍的高まった。また、これに冷凍船の開発がもたらした南北両アメリカ大陸からヨーロッパへの穀物の流入も加わって、広義の農業問題の内容を大きく変えたのである。かつて、農業問題とはマルサスが問題にしたように食料の不足ということであった。それが、19世紀末以降は農産物価格の下落と低迷に起因する、農業経営の困難というふうになったのである。

そう言っても、昭和初期まで生きた宮沢賢治が富裕な商家の息子として、

農業学校の教師として、肥料販売のセールスマンとして見たのは、古い飢えと貧困の問題であり続けた。賢治がマルサス人口論の全訳を読んだかどうかは、現状では未決の問題だが、聞き知ったマルサスの人口法則が賢治にとって目の前の現実とオーバーラップしていたことは間違いないだろう。

翻って、賢治を手掛かりにマルサスと菜食主義という観点から人口論を読み直すことで明らかになった論点もある。というより、知られてはいたが、人口論とのつながりで議論されてこなかった論点というべきであろうか。それは、マルサスが後年の彼の経済学体系のなかで、価値と対比して富にこだわったのは、なかでも食料にこだわり続けたのは、想像以上に人口論からの議論の継続という意味合いが強いかもしれないということである。

経済的あるいは価値論的な意味では、現代世界の消費生活のなかで食料は極めて小さな位置づけしか占めていないだろう。圧倒的にサービスが価値物の中心となっているからである。だが、古典派経済学ではサービスを生産する労働は不生産的労働と呼ばれていた。労働で生産すべきは有形物、なかでも食料であったのである。世界的な気候変動や人類の増加、農地の荒廃や水資源の枯渇などの諸問題に取り囲まれ、古い意味での農業問題が不気味な復活を遂げているかのように見える。そのなかで、賢治やマルサスが取り組んだ問題が、比喩的というより文字通りの意味で人類が取り組むべき課題に、再びなっているのかもしれない。

参考文献

- 猪谷善一「マルサス人口論の日本導入過程」『亜細亜大学経済学紀要』第1巻第1号、1-27ページ、1966年。
工藤哲夫『賢治考証』和泉書院、2010年。
高野岩三郎・大内兵衛訳『初版人口の原理』岩波文庫、1935年。
牧野静「賢治童話における殺生の問題：田中智学『本化妙宗式目講義録』を手がかりに」『倫理学』（筑波大学倫理学研究会）第33巻、103-113ページ、2017

年。

山崎好裕「古典派経済学における富と価値 マルサス・リカードウ・カルドーゾ」福岡大学先端経済研究センター・ワーキングペーパーシリーズ WP-2019-011、2019年。

『校本宮澤賢治全集』第8巻、筑摩書房、1973年。